

## 第3講：宗教批判

### 5：キルケゴールとバルト

宗教批判(フョエルバツハ型、ニーチェ型)に対するキリスト教思想からの応答

キリスト教的宗教批判：キルケゴール、バルト、ボンヘッファー

キリスト教の真理性、人間性をめぐって

古典的宗教哲学：理性的宗教と伝統的・歴史的・実定的宗教(教派の特殊性)

宗教批判：人間性からの宗教全般の徹底的な批判

キリスト教的宗教批判：墮落したキリスト教(近代)と真のキリスト教

#### 5 - 1：キルケゴール

#### 5 - 2：バルト

##### 1. バルト神学の基本的立場

1. 19世紀の近代社会に埋没したキリスト教とその神学(自由主義神学)に対する徹底的な批判とそれによるキリスト教の本来の在り方の取り戻し
2. 神と人間との絶対的な質的差異、神の下における人間の危機
3. 宗教社会主義運動(スイス)、弁証法神学の運動
4. 30年代以降：ナチス・ドイツ的キリスト者に対する教会闘争を指導・バルメン宣言  
弁証法神学を超えて

##### 2. 宗教批判への応答

##### 4. 宗教と啓示との峻別

宗教：神・救済へ向かおうとする人間的努力

自己救済の試み、不信仰としての宗教

##### 3. バルト神学の評価

- (1)フョエルバツハの宗教批判へのキリスト教神学からの応答の典型
- (2)近代のキリスト教とその神学の問題性を鋭く捉え、キリスト教と神学の固有性を再確認した。神学にはその固有の論理と方法がある。
- (3)フョエルバツハの宗教批判に十分に答えたことになるのか
- (4)宗教は不信仰な人間的努力という評価は、キリスト教の自己批判としてはわかるとしても、他の諸宗教を一方的にいっしょくたんに扱うのは正当なやり方と言えるか。バルトの立場からは、他の宗教との対話などあり得ない。

#### 5 - 3：ボンヘッファー

##### 1. ボンヘッファーの特徴

バルトの次の世代(1906-1945)

ドイツ教会闘争、ヒトラー暗殺計画

##### 2. ボンヘッファーの宗教論

##### 5. 宗教的な作業仮説としての神

世俗化された現代世界 = 成人した世界、無宗教の時代

キリストを宗教の対象としてではなく、この世界の主として非宗教的に語る

6.自己保存のためではなくこの世のために存在する教会

### 3. ボンヘッファーの評価

(1)宗教批判は宗教としてのキリスト教の自己止揚へと貫徹される。

(2)現代社会への洞察。伝統的宗教は質的な転換に直面しつつある。

(3)しかし人間はほんとうに成人したのか？

(4)現代社会への楽観論！ 60年代流行の神の死の神学や世俗都市の神学など

## 6：宗教批判の諸問題

ここで、これまでの近代的な宗教批判の特徴と問題点をまとめよう。

宗教批判の基本的論理

宗教批判と社会批判の内的連関

宗教批判の真理性

宗教批判の限界

宗教批判は肯定的な形態論を伴わない限り、単なる批判論にとどまる。積極的なものを何も生み出さない

宗教は自己批判(宗教批判)の契機なしに健全性を保てない

### <文献>

1.バルト 『カール・バルト著作集』『教会教義学』(新教出版社)

2.ボンヘッファー 『ボンヘッファー著作集』(新教出版社)

『共に生きる生活』(新教出版社)

3.大木英夫 『バルト』(講談社)

4.ユンゲル 『神の存在 バルト神学研究』(ヨルダン社)

5.ブッシュ 『カール・バルトの生涯』(新教出版社)

6.森平太 『服従と抵抗への道 ボンヘッファーの生涯』(新教出版社)

7.雨宮栄一 『バルメン宣言研究』『ドイツ教会闘争の展開』『ドイツ教会闘争の挫折』

(日本基督教団出版局)

8.宮田光雄編 『ドイツ教会闘争の研究』(創文社)

9.宮田光雄 『平和のハトリヴァイアサン』(岩波書店)